

図 9 主焦点面上の強度

事実上飽和に達するから、これ以上、輪帯を増しても光量を増すという以外には無意味で、光量を増すためには(ウッドがしたように)、輪帯の光を通さないところも光を通すようにし、これに光路差 $\frac{\lambda}{2}$ を与える透明な薄膜をつけた方がよく、これによれば同一半径の輪帯板で光量は4倍となる。
(1968年7月13日受理)

参考文献

- 1) A. H. Gollas, G. A. Gibert & A. B. Hitterland: Jour. SMPTE 74 (1965) 321; P. A. Newman & V. E. Rible: Appl. Opt. 5 (1966) 1225
- 2) E. Lommel: Abh. Bayer. Akad. 15 Abt. 2 (1885) 233
- 3) B. R. A. Nijboer: These (Groningen, 1942) 43
- 4) A. Boivin: Jour. Opt. Soc. Am. 42 (1952) 60
- 5) E. W. H. Selwyn: Photo. Jour. 90B (1950) 49
- 6) Rayleigh: Sci. Pap. I 513

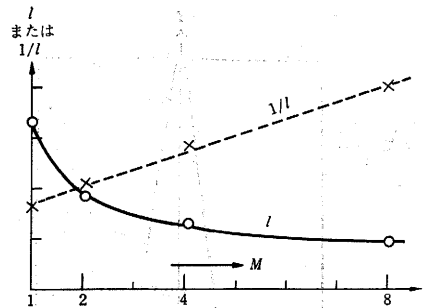


図 10 半値幅と輪帯数

- 7) E. W. H. Selwyn (前出実験): 佐柳和男: Jour. Opt. Soc. Am. 57 (1967) 1091 (理論)
- 8) J. L. Solet: Ann. d. Phys. VI 156 (1875) 99

付記

著者は、昭和 25 年東京女子大の数学科を卒業後直ちに当時の第二工学部の私達の研究室に入れ、以来十数年間得意の数値計算をもって皆の研究を助けて下さったが、昭和 42 年 10 月、自動車事故のため突然に他界された。同姉の存在がわれわれになくはならぬものであったことは私達の研究室から出た論文の多くが同姉との連名かまたは同姉に謝辞が述べられてあることから判られると思うが、特に干渉色表の完成はその代表的なものであった。その他界は、われわれにとって手足をもぎ取られたようなものである。1964年から2カ年米国に留学され、帰国後回折像の諸性質を数値計算を主とした解析により明らかにすべく、ここに述べた計算を出発点とし周辺波の理論をも用い、斜め入射や収差のある場合の計算を進めていた矢先であった。これ等のうち、本年春の学会に発表を予定しておられたものに筆を加えたのが本文で、これ以外は整理し得なかったが、同姉の一周忌に際し、これのみでもその墓前に捧げ、研究室員一同と共にその冥福を祈りたいと、とりあえずまとめたものである。

なお、入手困難な文献の複写を賜わり、これをまとめるのにご助力下さった服部広島大学教授に厚くお礼を申し上げます。
(教授 久保田 広 記)

正 誤 表 (8 月号)

ページ	段	行	種 別	正	誤
40			図 3 説明	定周期 3 ダイアル	定周期ダイアル
44	右	10	式	$H_i = E_{sL} - E_s$ (2)	$H_i = E_{sL} - E_s$
52			図 2 説明	MTR (平均遷移率)	MTR (平均遷移表)